

特別寄稿

J. S. ミル研究の現在

川名 雄一郎

1. はじめに¹

20 世紀後半から現在にいたるジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill, 1806-1873) 研究にとって決定的に重要なのは、トロント大学におかれたミル・プロジェクトによって 1963 年から刊行が始まり 1991 年に完結したトロント大学版『ジョン・スチュアート・ミル著作集』である

(Priestley and Robson eds. 1963-1991²)。編集方針、収集・収録された論考・書簡の範囲、厳密なテキスト・クリティーク、詳細な各版対照など、多くの点で決定版と言ってよいこの著作集によって、ミル研究は資料の面ではほぼ完備した状況下でおこなわれるようになった。³ また、資料の整備という点では、とりわけ近年のデジタル・ヒューマニティーズと総称される動向がもたらした／つつあるものも看過することはできないだろう。⁴

このような資料の整備という事情とともに、今世紀初頭にミルへの関心が高まるきっかけのひとつとなったのは、2006 年が生誕 200 年というアニバーサリー・イヤーであったことであり、この時には記念の国際学会や研究セミナーなどがいくつか開催された。⁵ 筆者が参加したのは、The John Stuart Mill Bicentennial Conference 1806–2006, University College London, 5-7 April 2006 と Liberty, Human Values and Utilitarianism: Bicentenary Conference of John Stuart Mill, Yokohama National University, 9-11 September 2006 であるが、前者については、全体講演の一部とセッション報告のいくつかを収録した Varouxakis and Kelly eds (2010) が刊行されている(なお、このふたつの学会については、深貝 2007 で紹介されている)。

2・功利主義-形態と幸福観

功利主義に関する議論は、思想史のおよび理論的な点から、19 世紀の ジェレミー・ベンサムからヘンリー・シジウィックまでの古典的功利主義 とそれ以降の現代功利主義に分類されることが一般的であるが、現代功利主義研究の進展にともなって、社会の幸福の最大化を究極目的とする理論としての功利主義はきわめて細分化し複雑なものとなっている。そして、それに歩を合わせる形でミルをはじめとする古典的功利主義に対する理解も深められながら多様なものとなっている。以下では、功利主義の形態および幸福観について、まず功利主義研究全体の状況について簡単に述べ、その上でミルに関する議論についてみていくことにしたい。

2-1・功利主義の形態

功利主義の形態、すなわち功利性をどのように評価するかという問題については、(1)行為功利主義(act utilitarianism)と規則功利主義(rule utilitarianism)、(2)直接功利主義(direct utilitarianism)と間接功利主義(indirect utilitarianism)などの分類がなされ、これらの組み合わせによってさまざまなタイプの功利主義が描き出されることになる。簡単に確認しておく、行為功利主義が個々の行為の帰結を功利計算の対象とする立場であるのに対して、規則功利主義は行為功利主義の難点を克服するものとして現れた、個々の行為ではなく規則を功利計算の対象とする立場である。そして、直接功利主義は、何が対象であるかは別にしても、行為に際して功利性をつねに考慮しながら行為するべきだとする見解であり、間接功利主義は功利性を考慮しながら行為することを必ずしも要求しない見解である。これらのうちどの要素をどの程度までミルの議論に読み込み、どのようなタイプの功利主義者としてミルを理解するかについて研究者の間で意見の一致があるわけではない。

ミルの功利主義論を考える上での最重要文献が『功利主義』であることは言うまでもないが、その『功利主義』では、第 2 章「功利主義とは何か」において行為功利主義的な議論が展開される一方で、第 5 章「正義と

功利性の関係について」では規則功利主義的な議論がなされている。ミルを行為功利主義者とみなすか規則功利主義者とみなすかの違いは『功利主義』におけるこのふたつの章のいずれを重視するかという違いにも密接に関係している。

ミルの功利主義論についての伝統的解釈というべきものは行為功利主義的解釈であり、その近年の代表的論者はクリスピーである。もっとも、ミル 功利主義論の入門書としても評価の高い Crisp (1997) において提示されているのは、つねに功利性の原理を参照することによって意思決定をおこなう単一レベルの行為功利主義によるミル解釈ではなく、功利主義の評価の対象については行為功利主義、行為者の意思決定については間接功利主義であり、功利性の原理以外の複数の原理が対立した時に功利性の原理を参照する多層レベルの功利主義というミル解釈である (*Ibid.*, 105-112)。

ミルに規則功利主義的な考え方があることを最初に指摘したのは Urmson (1953) であり、それ以降、規則功利主義的ミル解釈が盛んに論じられることになった。近年この立場に立っているのは、細部には異同があるが、Lyons (1994)、Riley (1998)、Miller (2010) などである。また、間接功利主義的ミル解釈は、Gray (1983) によって、後述する『論理学体系』における「生の技芸 (Art of Life)」という概念を踏まえた上で提示されたものである。

近年では West (2004; 2014) や Shaw (2014) のように、ミルは両方の立場をそれぞれの状況によって使い分けており、このような区分による解釈はミルに馴染まないとする研究者も多い。さらに、ブリックは行為功利主義／規則功利主義という二分法の有効性に疑問を付し、「サンクション功利主義」と呼ぶ立場を打ち出している。これは、行為の善悪を、その功利性によってではなく、それに対してサンクションを適用することの功利性によって定義する、間接功利主義的な形式の功利主義である (Brink 2013; 2014)。

2-2・幸福観

一般に幸福を唯一の望ましい目的とみなす福利主義 (welfarism) の立場に功利主義が立っている以上、⁷ 幸福という概念自体をめぐる議論も避

けては通れない。この点については、快楽説(hedonism)、欲求充足説(desire satisfaction theory)、客観的リスト説(objective list theory)という3つの立場が主要なものとして挙げられるのが一般的である(Parfit 1984, Griffin 1986)。⁸ 現在ではさらに細分化がすすんでいるが、ここではとりあえずこの分類にしたがって簡単に確認しておきたい。

快楽説は、19世紀以来広く受け入れられてきた、そして近年ふたたび再評価の動きが見られる見解であり、快い心的状態を幸福の構成要素とみなす見解である。すなわち、快楽や苦痛という主観的経験を評価の基準とし、快楽が多く苦痛が少ないほど幸福な状態にあるとみなすのである。それに対して、欲求充足説は、快楽説のように心的状態に着目するのではなく、欲求の対象となる客観的事態の成立をもって福利になるとみなす、いわば主観説と客観説のハイブリッドな立場である。この欲求充足説は1970年代半ばから1980年代にかけて大きな注目を集めることになった見解であるが、この見解が支持を広げたことにはいくつかの理由が考えられる。ひとつは、経済学における快楽説批判からの顕示選好への着目という行動主義的な流れである。別の理由として重要なのは、Nozick (1974)による有名な「経験機械」の議論による快楽説批判を契機とした、快楽説の弱体化である。この快楽説批判は発表当時、大きな影響をもち、多くの功利主義者は一元論的な快楽説から多面的な議論へと軸足を移し、欲求充足説が快楽説に代わりうるものとして支持されるようになった。しかし、行為者本人が実際に欲求充足を経験する必要があるかどうかという経験要件

(客観的事態の成立)の問題、さらには適応的選好形成や外的選好の問題など、欲求充足説にも難点が多く、現在ではこの立場をとる研究者は必ずしも多くはない。

快楽説と欲求充足説が主観説として括られるのに対して、⁹客観説である客観的リスト説は、快楽という状態や欲求の対象という主観的要素に関係なく、幸福の構成要素となる客観的な善が存在していると考ええる立場である。この客観的リスト説には、さまざまなヴァリエーションがあり、現代の著名な自然法論者であるフィニスによる7つの基本的善というアイデアがよく知られているほか、センの「ケイパビリティ・アプローチ」を踏まえたヌスバウムのような、アリストテレス的卓越主義あるいはエウダイ

モニズムの立場もある。なお、卓越主義的な見解にも、いわば欲求充足説と客観的リスト説とのハイブリッド型で、リストアップされた項目の個々について必ずしも絶対性を要求することなく、客観的リストの項目からの主観的選択の余地を認めるグリフィンのような立場もある一方で、リンクのようにさまざまな価値を快樂や欲求に還元することなく、客観的にとらえようとする「客観的功利主義」の立場もある。

ミルの功利主義論に関して言えば、快樂説を採用しているというのが伝統的解釈であった。そして、近年の代表的な快樂説的ミル解釈は、Crisp (1997) や West (2004; 2014) などである。「完全な快樂説」は、クリスピーによれば、幸福が快い経験に存しているという実質的要素と、これらの経験をその人にとって良いものなのはそれらが快いことであるからだという説明的要素からなっている (Crisp 1997, 26)。ミルは『功利主義』のなかで、「幸福とは快樂、ならびに苦痛の欠如を意味し、不幸とは苦痛、ならびに快樂の不在を意味する」とか「快樂、および苦痛の欠如が目的として望ましい唯一のものである」とはっきり述べて上述の実質的要素を示しているし、「すべての望ましいものは、それに含まれる快樂のために、あるいは快樂を増し苦痛を防ぐ手段として望ましい」と述べていることから説明的要素も持っているということになる (CW, X, 210)。その上で、クリスピーはミルが快樂 (pleasure) と愉樂 (enjoyment) を互換的に使用していることを根拠にして、ミルの議論を愉樂理論として特徴づけている (Crisp 1997, 27-28)。¹⁰

また、水野 (2014) は、「快樂」を快い意識状態だけでなく、それと觀念連合によって結びついたさまざまなものを含むものとして理解することによって、快樂主義を基本としながら客観的リスト説の主張も取り込んだ「拡張された快樂主義」としてミルの議論を解釈している。このように一見すると、快樂説というミル解釈にはテキスト上の強い根拠があるように思われるが、他方で、彼の議論には(とりわけベンサムの快樂主義的人間観に対する批判のように)快樂説以外の見解を採用しているように思われる箇所もあって、彼の幸福観をどうみるかはいまだに議論の多い論点である。

欲求充足説によるミル解釈としては内井 (1988) や Berlin (1991) が挙

げられる。また、Donner (1991) のようにこの説を快楽説と折衷的に採用する研究者もいる。欲求充足説のテキスト上の根拠とされるのは『功利主義』における、ふたつの快楽の間での優劣を決めるのは両方の快楽を経験した人の判断であると述べている箇所であって、ここではそのような人の欲求を満たすものが幸福であるという議論がなされていると解釈される。さらには、ミルはあるものを欲することと快いとみなすことは同一の心理現象であると論じており、この考え方も欲求充足説の根拠のひとつとされる。しかし、欲求充足説の根拠として挙げられる言明は、テキスト全体の文脈に照らせば快楽説の枠内で解釈でき、快楽説を批判して欲求充足説を採用するための根拠として十分とはいえないものである。

客観的リスト説によるミル解釈の根拠として挙げられるのは『功利主義』における有名な快楽の質的差異の議論や高級な快楽を選択するのは尊厳の感情によるという議論のほか、幸福の構成要素として快楽以外の具体的な項目をミルが列挙しているという事実などである。ただし、客観的リスト説についても、欲求充足説の場合と同じように、ミルのテキストにある言明は根拠とするには必ずしも十分なものとはいえない。

客観的リスト説によるミル解釈については、Gray (1983) や Berger (1984) などもおこなっているが、ここではブリンクの議論をとりあげておきたい (Brink 1992; 2013; 2014)。ブリンクは快楽説解釈を放棄し、ミルの議論にみられる不整合を解消するべく、次のようなミル解釈を提示している。ミルは人間を他の動物から区別するような高次の能力を行使することに幸福を見出しており、人間を進歩する存在とみなしている。また、このような高次の能力の行使は客観的に善いものであると考えている。高次の能力を行使するという行為自体が高次の快楽であり、この高次の快楽は低次の快楽に絶対的に優越するものであり、そこでは量による比較はなされえない。したがって、自由は本質的な善ではないが、高次の能力の行使のための必要条件であり、そのような観点から擁護されるべき権利であるとされる。ブリンクはこのような解釈から、ミルの立場を客観的リスト説的な卓越主義としてまとめている。

また、客観説のうち、現在大きな影響をもつようになっている、快楽という心的状態ではなく、ある種の活動やあり方が実現されることを幸福と

みなすエウダイモニズムをミルに見出す解釈として、ヌスバウムの議論にも言及しておきたい(Nussbaum 2004)。彼女は、「精神の危機」後のミルが、それ以前から信奉していた快樂主義的幸福観を維持しながら、新たにエウダイモニズム的幸福観を採用したとして、ミルの思想におけるこれらふたつの幸福観の併存を指摘している。¹¹

2-3・まとめ

ここまで、形態論と幸福観に着目しながらミルの功利主義論についてのさまざまな解釈を見てきたが、ミル自身の言明はこのような現代的な分類をあてはめるにはしばしば曖昧であり、それぞれの解釈に押し込めようとする研究はしばしば行き過ぎたアナクロニズムに陥りがちである。それゆえ、これらの分類に基づくミル功利主義論の解釈について決定的なものが提示されることを期待するのは難しいかもしれない。それでも、それぞれの解釈はそれぞれの仕方でもミルの議論の特徴をとらえており、ミル解釈としての魅力的なものを含み、ミル研究の深化を象徴しているように思われる。

3・哲学と科学方法論

3-1・経験論哲学・認識論

ミルの経験論哲学に焦点を合わせた重要な研究として、ここでは Scarre (1989) と Skorupski (1989) に言及しておくことにしたい。ミルの哲学を検討する際に主要な検討対象となるのは、『論理学体系』(初版 1843 年、第 8 版 1872 年)と『ウィリアム・ハミルトン 自身 哲学の検討』(1865 年)である。

ミルの哲学については政治的見解との関連が(そのことの含意をどのように理解するかは論者によって差があるにしても)強調されることが多いが、Scarre (1989) は、ミルの論理学や形而上学といった哲学的議論を政治的見解から切り離して論じ、純粋に哲学的な観点から彼の経験論哲学の特質を描き出すことを試みた。同書は、ミルの哲学が一貫性を欠いているという批判に反論しつつも、あらゆる存在を心的対象へ還元しようとしたミ

ルの議論が、あらゆる存在を感覚へと還元する観念論の立場と、私たちの感覚の外に感覚を呼び起こす物自体が存在しているとする科学的実在論の立場という、相容れないふたつの形而上学的見解に引き裂かれてしまっていたことを論じている。

それに対して、Skorupski (1989) は「啓蒙」や、人間の精神や行為なども自然現象の一部であり同じ自然法則に従うとする「自然主義」という観点から、ミルの論理学や形而上学の哲学的再構成をおこなった。そして、その議論を踏まえた『自由論』や『功利主義』の解釈を示すことで、ミルにおける経験論哲学と倫理学、政治理論の関連についても包括的に論じている。¹²

3-2・『論理学体系』

16歳の時に著述活動を開始したミルが37歳の時に出版した最初の著作であった『論理学体系』は、ミル自身が『自由論』とともに後世にもっとも長くのこっていきたくてと自負した著作であった (*Autobiography*, CW, I, 259)。同書には生煮えのものも含めてミルの思索の成果がほとんどすべてと言ってよいほど詰め込まれており、ミル研究者にとってもアイデアの貯蔵庫であり尽きることのない着想の源泉である。とはいえ、自然科学に関する豊富な知識にも裏付けられつつ人文社会科学のほぼすべての領域にわたる膨大なトピックを扱っている『論理学体系』の包括的で詳細な検討はようやく緒に就いたばかりの段階であり、全体像が解明され、この著作がミルの思想体系のなかでもっている意義が明らかになるまでには今しばらく時間がかかるだろう。

20世紀前半には哲学者としてのミルに対する評価、そしてその主著である『論理学体系』に対する評価はけっして芳しいものではなかったが (山本・川名 2006, 126)、1970年代以降の修正的解釈によるミル研究の進展を経た近年では状況は様変わりしており、『論理学体系』へのあらたな関心の高まりを最近のミル研究における注目すべき傾向のひとつとして指摘することができるだろう。たとえば上述の Scarre (1989) や Skorupski (1989) のように『論理学体系』(および『ウィリアム・ハミルトン 1790-1856 哲学の検討』)における議論を詳細な検討の対象とした研究や、Skorupski

ed. (1998) のように『論理学体系』の理解のために重要な議論を提供している研究はあるものの、これまで『論理学体系』を直接的に対象とした研究は他には形成史的な Kubitz (1932) や矢島 (1993) があるくらいであった。しかし、最近になって、Loizides ed. (2014) が公刊された。同書は、ミルの言語哲学や数学の哲学、自由意志論、科学方法論をはじめとした幅広いトピックについて、理論的および思想史的な観点から議論がなされており、これまでにない包括性をもった『論理学体系』についての論集となっている。

また、誤謬についての包括的な議論が展開されている『論理学体系』第 5 篇と、思想・言論の自由を擁護し意見の多様性の重要性を論じた『自由論』第 2 章を関連づけて論じている Rosen (2006) も『論理学体系』を軸にしたミル政治思想の読み直しとして興味深い。

3-3・「生の技芸」

ミルは『論理学体系』第 6 篇で、「道徳、深慮、審美」という、それぞれに別の目的を扱う 3 つの技芸 (Art) を挙げ、人間の生全体を扱う技芸として、この 3 つから構成される「生の技芸 (Art of Life)」を提示した。この「生の技芸」は、ライアンによってその重要性が指摘されて以来 (Ryan 1970. Cf. Ryan 2014)、ミルの思索を統一的に理解する要になりうる概念として注目されてきたが、本格的な検討は手つかずのままであった。Eggleston, Miller, and Weinstein eds (2011) はさまざまな分野の研究者が集って、この概念について論じ、またこの概念を手がかりとすることでミルの思想を読み解いていこうとする試みである。ただし、同書は「生の技法」自体の研究というよりは、その概念を意識しつつミルの主要著作を解釈しようとする志向が強く、その意味では『ジョン・スチュアート・ミルと生の技法』というタイトルから受ける印象ほど「生の技法」に焦点があてられているわけではない。それでも、それぞれの著者の得意とするトピックをこの「生の技法」と関連づけて読み解こうとする個々の議論は興味深く、示唆に富む論文集である。

3-4・科学方法論

科学方法論については、Snyder (2006)が幅広い射程の議論によって重要な示唆を与えてくれている。同書はさまざまなトピックについてウィリアム・ヒューウェルとミルを対峙させ、科学や社会をめぐる両者の議論を比較しながら、それぞれの議論の特質や彼らを取りまいていたヴィクトリア時代の知的コンテクストを描き出している。なお、社会科学方法論に関して、筆者は川名 (2012) において、Collini (1980) や Collini, Winch, and Burrow (1983) から初発の示唆を受けながら、ミルの「社会の科学」構想の枠組や方法論を検討した。その議論ではミルの歴史論とエソロジー（性格形成の科学）をこれまでの研究史以上に重視したが、エソロジー構想への着目は近年のミル研究の特徴のひとつとなっている。

ミルの経済学方法論に関しては、日本のミル経済学（や広く社会科学）の方法論に対する持続的な関心が日本の経済思想史分野におけるミル研究におけるひとつの特徴といてよいように思われる。ミルの経済学方法論については、日本語でも国際的にみても高い水準の研究がこれまで多くなされてきており、今後はこの成果を国際的に発信していくことが課題となるだろう。近年ではとりわけ、「演繹と帰納」という視角からミルを含めた 19 世紀の経済学方法論について詳細な見取り図を提示している佐々木の一連の研究(佐々木 2001; 2010; 2013)や松井(2010)などがある。

4・宗教論

よく知られているように、ミルは「最初から、言葉の普通の意味での宗教的信条をまったくもつことなしに育てられた」が(*Autobiography*, CW I, 10)、まったく宗教に関心をもつことがなかったわけではなかったし、オーギュスト・コントの人類教(*Religion de l'Humanité*)から影響をうけ、遺稿をまとめた『宗教三論』では、宗教の有用性という見地から、超越的の神性を否定的にとらえた「人間性の宗教(*Religion of Humanity*)」や、靈魂の不滅や来世への関心を示したいいわゆる「希望の神学(あるいは宗教)」などのアイデアを提示している。しかし、ミルの宗教論は彼の思想を理解するために本質的な重要性をもっているとみなされることが少なく、それ

ゆえに本格的な考察の対象となつてはこなかった。しかし、近年、レイダーやセルによってミルの宗教論を主題とした研究書が相次いで出版された (Raeder 2002, Sell 2004)。いずれも思想史的研究として『宗教三論』を分析しているが、とくにレイダーは、ベンサムおよびジェイムズ・ミルの影響の分析をはじめとして、ミルがこの宗教の構想を抱くに至った経緯を描き出すだけでなく、『自由論』や『功利主義』などとの関連も視野に入れることによって、ミルの思想における宗教論の含意をさぐっており、議論の細部には異論も多いが、この分野では現時点でもっとも広範な研究である。

日本でも、このトピックは本格的な研究が現れてきているが、なかでも 有江 (2008) は、ミルが 16 歳の時に読んだ『人類の現世の幸福に対する自然宗教の影響の分析』との関係にまでさかのぼって検討しており、¹³ 日本語ではもっとも幅広くミルの宗教に関する見解を扱った研究となっている。有江はミルの『宗教三論』のエッセンスを「啓蒙の合理主義を堅持する社会学者、社会改良家、功利主義者ミルによる、人間の内発的な自己陶冶を考慮した新宗教の提案である」と総括している (有江 2008, 24)。

5・政治・社会思想

5-1・自由論、正義論、性格論

これまでミルの政治思想研究といえば、『自由論』が主役であり、主要な関心は自由や自由主義をめぐる問題に向けられ、古典的リベラルの代表者としてのミル像が彫琢されてきた。かつては『功利主義』と『自由論』の関係、すなわち功利性の原理と自由の原理の関係が問題にされることが多かったが、この問題については、あくまでも功利性の原理を究極的な第一原理とし、『自由論』での議論をその系とみなす解釈、すなわちミルの自由擁護論に功利主義的基礎を見出す解釈が主流になってきている。とは いえ、ミルの自由主義が功利主義と矛盾なく両立しうるものなのかは、依然として議論の多い問題であり続けている。たとえば、ミルの自由原理を非功利主義的に解釈する Ten (1991) や、質的快樂説と卓越主義の **専断** を指摘して非自由主義的な姿勢を強調する Hamburger (1999) などの議論

がある一方で、快楽の質的差異をその量における「無限の差」とみなす快楽説と規則功利主義による Riley (1998) のミル解釈はこれらの議論に対する反論を提示している。

ミルの自由主義の内実については、単純なラベリングに満足することなく、その複雑さ・多様さへの理解が深まってきており、いくつか例をあげておくと、Skorupski (2006) は、思想の自由を擁護するミルの議論を ロールズの言う「包括的リベラリズム」として捉え、そこにミルの思想の 現代的意義を見出す魅力的な議論を提示しているし、Ten ed. (2010) では、『自由論』の内在的分析とともに、現代政治哲学における様々な理論や領域(政治的リベラリズム、共和主義、多文化主義、応用倫理学)との比較を通じて、ミルの自由論の特質が検討されている。さらに、Clayes (2013) は、自由とパターナリズムという、ミル研究にとってけっして色褪せることのないテーマを論じている。

この分野ではミルの正義論への関心のあらたな高まりも最近の傾向のひとつとして指摘できるだろう。もちろん、これまでも正義の観念についてのミルの議論への関心は高いものがあったが、その関心は、主に『功利主義』第 5 章の議論に向けられ、功利性の原理と正義の観念の両立可能性の問題などに向けられてきた。しかし、このような問題への継続的な関心に加えて、近年では、政治哲学における正義論への関心の高まりにともなって、ミルの(政治的・社会的)正義についての議論を再構成し、ロールズ やセンなどの現代の政治・社会哲学者による(ミル)功利主義批判に対して正面から向き合おうとする研究が増えてきている。たとえば、Kahn ed. (2012) は、ミルの正義論についての初めての論集であり、正義をふくむさまざまな道徳的概念についての議論とともに、ミルと現代哲学者の正義論の比較を試み、ミルの正義論の現代的意義をさぐっている。また、Su (2013) はミルの正義に関する議論を再構成したうえで、その議論をロールズ、セン、ハイエクの議論と比較検討しつつ、彼らによるミル・功利主義批判への応答を試みている。

また、長年にわたってベンサム研究を牽引してきたローゼンが近年集中的にすすめてきたミル研究の成果が Rosen (2012) としてまとめられている。ローゼンは『論理学体系』と『経済学原理』を中心としつつ、これら

の著作が執筆・出版された時期にミルが交流を深めていたコントとの往復書簡を補助線とすることによって、またジェレミー・ベンサム、ジェームズ・ミル、ジョージ・ベンサム(ジェレミーの弟サミュエルの子)、アレクサンダー・ベインといったミルを取り巻いていた思想家への目配りによって、ミルの政治思想全体の大膽な再構成を試みている。

ただし、ローゼンの試みの成否については疑問が残る。たとえば、ローゼンはエソロジー(性格形成の科学)という未完の科学構想に着目し、ミルは最終的にはエソロジーの確立に失敗しており、晩年の著作はこの構想とは直接的な関係はないという標準的理解に対して、『自伝』『自由論』『女性の隷従』『代議政治論』などをエソロジーのケース・スタディーとして読むボール(Ball 2000)の解釈を踏まえつつ、晩年に書かれた多くの著作においてもエソロジーが重要な役割を担っていたと解釈している(Rosen 2012, 86)。しかし、ローゼンやボールの解釈はテキストに積極的根拠をもたない過剰な読み込みであって、カパルディやコリーニが論じていたように(Capaldi 1973, Collini, Winch, and Burrow 1983, ch. 4)、エソロジーに対するミル自身の晩年に至るまでの意欲にもかかわらず、ミルが最終的にエソロジーという科学を確立することができなかったという事実の重要性を看過するべきでないだろう。それでも、このエソロジー構想は、ミル研究にとって躓きの石になりかねないものの、魅力的な議論であることは間違いなく、今後も思想体系のなかでの位置づけをめぐる議論がすすんでいくだろう。¹⁴

ミルの政治・社会思想研究については、このような問題群への持続的な関心とともに、以下で見るように、民主主義・民主制度論や国際思想などの分野でもミルへの関心が高まってきているのが近年の傾向である。たとえば、ミル生誕200周年を記念した論文集である *Urbinati and Zakaras eds (2007)* や、2011年にキプロスで開かれた研究集会から発展した論文集である *Demetriou and Loizides eds (2013)* は、そのような傾向を反映した構成になっている。また、下條(2013)も幅広いトピックを扱いながら、この傾向を反映した研究となっている。

5-2・民主主義論と古典古代論

ミルの民主主義論については、政治理論・思想史研究における大きな潮流を反映する形で検討されてきており、1980年代以降、Semmel (1984)、Justman (1991)、Miller (2000)などに代表される共和主義的な関心からの研究や、Baum (2000)やUrbinati (2002)による熟議の民主主義の観点からの研究が試みられている。

このなかでは、たとえば、Urbinati (2002)は熟議の民主主義論者という新しいミル像を提示している。また、ミルの自由論について、「服従からの自由」という概念を提示しているが、これはスキナー (Skinner 1997; 2002)やペティット (Petit 1997)が共和主義思想史研究において、消極的自由と積極的自由というバーリン的二分法では説明しきれない第3の自由概念として提唱したネオ・ローマ的自由に近似なものとされている。¹⁵

ところで、熟議の民主主義の観点からのミル研究に対する重要な貢献である Urbinati (2002)は、近年関心を集め議論されている古典古代に関するミルの見解というトピックを論じ、ミルの政治思想・民主主義論に古典古代論という視角を導入した嚆矢としても重要な意義をもっている。アービネイティは同書で「現代民主主義理論に対するミルの貢献を理解するための鍵」(Urbinati 2002, 2)としての古典古代へのミルの眼差しに着目し、古代アテネの政治制度を肯定的に評価し、その知見を自らの政治思想に積極的に取り入れた思想家としてミルを描き出した。アービネイティによれば、有権者に対する代表者の責任と自律という代表(間接)民主主義に固有の問題を熟議という観点から解決しようとしたミルにとって、古代アテネの直接民主主義と近代の間接民主主義はいずれも熟議という観点から連続的に捉えられるものであり、ミルの代表制論は古代アテネの政治制度から多くを学んだものであった。

このトピックについて、Urbinati (2002)以降でもっともまとまった議論を提示しているのが Loizides (2013)である。同書は、アービネイティ以降のこのトピックに関する研究の進展を踏まえつつ、ミルの古代ギリシア哲学の受容を19世紀イギリスの文脈の中で読み解こうという試みである。おそらくは父ジェイムズ・ミルの影響によって、ミルはきわめて早い段階からプラトンの著作に親しんでおり、プラトンの対話篇のいくつかの

翻訳や解説を雑誌に発表するなどしていたが、ミルの古代ギリシア哲学との関わりをまとめて論じる研究はこれまではほとんどなかった。同書では、最初に古典古代の哲学をめぐる 19 世紀前半(ジョージ・グロートらの著作によって古代ギリシア哲学への関心が高まる以前)のブリテンの知的コンテクストが論じられ、ベンサム主義的功利主義の幸福観に「プラトンの」観念を取り入れた思想家としてのジェイムズ・ミルが描き出されている。それを踏まえてミルのプラトン読解が論じられるとともに、ミルの道徳哲学における性格形成や自己発展の重要性が指摘され、ミルの徳倫理的な思考へのプラトンの議論の影響が論じられている。¹⁶

6. 国際政治・国際関係思想

6-1・不干渉論

近年の国際政治理論・思想研究の活況にもなって(Armitage 2004; 2014)、1990 年代以降、国際関係、ナショナリティ、帝国といった問題群がミル研究においても大きな位置を占めるようになり、この分野では多くの成果が現れている。

まずはミルの内政干渉・不干渉論に触れておくことにしよう。この議論への関心は、自由主義・民主主義を標榜する先進国による、民主化や人権の擁護を目的とした発展途上国に対する介入がしばしば起こっている現代の世界情勢をも反映したものであろう。このトピックについては、ミルはさまざまところで言明を残しているほか、『自由論』が出版されたのと同じ 1859 年に発表された「不干渉論」(‘A Few Words on Non-Intervention’)という、ウォルツァーが取り上げたことによって政治学者の間でよく知られるようになった論考がある(Walzer 1977, 87-91. Cf. Walzer 2007)。この論考でミルは、文明国による野蛮状態にある国に対する干渉や専制的統治を正当化するとともに、文明国間であっても一定の条件のもとで介入が正当化されることを主張していた。この興味深い論考について近年では、Varouxakis (1997) や Doyle (2013) が詳細な検討をくわえている。

6-2・帝国の思想史

このトピックについては、枚挙にいとまがないが、ここでは Mehta (1999) 以降、近年の代表的な業績に触れておくことにしたい。

Pitts (2005) は 18 世紀後半から 19 世紀半ばまでの英仏における帝国と自由主義をめぐる思想史を扱い、そのなかの 1 章を割いてベンサムおよびミル父子の議論を検討している。ピッツは権威主義的なベンサム解釈を批判しながら、自由主義的ベンサム像を提示した上で、その議論を権威主義的な傾向のより強いミル父子の議論と対比させている。ピッツの考えでは、ベンサムにくらべてミル父子の議論が権威主義的であったのは、後者が進歩の観念をもっていたからであった。彼女はこのような見地から、国民性という概念、社会の発展段階論的枠組み、文明先進国による非文明国・文明後進国に対する啓蒙専制的支配を是認する姿勢などに着目し、ミルに「帝国への転回」を見出している。

また、19 世紀から 20 世紀の国際思想について近年精力的に研究をすすめている若手研究者の代表格であるベルがミルの植民地論を検討している (Bell 2010)。ベルはミルの植民地正当化論の変遷をたどるとともに、征服による植民地ではない移民による植民地についてのミルの議論に着目し、ミルの国際秩序観を単純な帝国主義的な枠組みとは異なった視点から論じている。

さらに、もっとも重要な研究として、近年のミル研究を先導してきたヴァローカキスの最新の成果がまとめられている (Varouxakis 2013)。ミルの国際関係思想については、おそらくこれまでまとまった研究がなかったこともあって、それへの言及が現代の状況に対する認識を直截的に反映しがちであった。同書では、このようなアナクロニズムが批判されながら、国際法は法というよりは道徳であるとする (ジョン・オースティン から影響を受けた) ミルの議論の考察のほか、¹⁸ 先に取り上げた「不干渉論」や関連する議論の読解、帝国主義や戦争と平和をめぐるミルの議論が検討され、ヴィクトリア時代の社会的・政治的コンテキストの中でミルの思想を位置づける議論がなされている。¹⁹ 本書については、Varouxakis (2002) と合わせて読むことが重要であろう。

ピッツも指摘しているように、ミルの国際思想を理解する鍵となるの

は、文明の段階論的進歩という考え方である。この点に関する近年の成果として Levin (2004) があり、ミルが非文明国とみなしていたインドや中国に関する議論も取り上げながら、ミルの文明観を検討している。ミルの考えでは、インドが過去から現在にいたるまで野蛮な状態にとどまり続けていたのに対して、中国は過去には高い文明に到達していたのにもかかわらず停滞に陥った国家であり、それゆえにヨーロッパにとって重要な教訓を示している国家であった。こうして、ミルはヨーロッパ諸国が「中国的停滞」に陥ることを強く危惧していた。

ミルの文明観と密接に関係するのが彼の歴史観である。サン・シモンやコントといったフランス思想家やサミュエル・テイラー・コールリッジの歴史哲学から大きな影響を受けていたことは、これまでも十分に注目されてきた。しかし、ミルにはまとまった歴史論がなかったこともあって、その歴史論自体はこれまで本格的な検討対象となつてこなかったが、近年では、ミルの歴史論から進歩の観念を読み解こうとした López (2012) のほか、川名 (2012) がミルの歴史論にこれまでの研究史以上に重要性を与える解釈を提示している。

6-3・インドとアイルランド

6-3-1・インド

ミルの著作におけるインドへの言及は『経済学原理』における比較土地制度論『代議政治論』における植民地統治論などがよく知られており、研究史においてもしばしば関心が向けられてきた。しかし、ミルが東インド会社に同社の社員であった父の手引によって 1823 年に入社してから、インド大反乱の結果として会社が廃止される 1858 年まで、通信審査部所属の社員としてインド統治行政に関わっていたにもかかわらず『自伝』などでこの経験についてほとんど触れていないこと、インド向け送達文書の起草という、いわば会社の公式見解に関わる業務であったために、そこにミル自身の見解をどの程度読みこむことができるか判断が難しかったことなどもあって、ミルのインド論は研究がなかなか進まない分野のひとつであった。

ミルのインド論についての先駆的研究としては、歳入部門と司法部門を

中心に功利主義者の議論を検討した Stokes (1959) があるが、トロント大学版著作集第 30 巻(刊行は 1990 年)にインド関係の論考が、送達文書のリストとともにまとめて収録されるなど資料の整備が進むなかで、新しい研究が現れてきた。なかでも、Zastoupil (1994) は送達文書を広範に利用して、インド統治の経験がミルの思想にどのような影響を与えていたかを検討した研究として異彩を放っている。

同書によれば、ミルは父ジェイムズ・ミルの忠実な追従者として職歴を開始したが、1826 年の「精神の危機」や 1836 年の父の死などによって、直接統治による急進的改革を主張していた父と違った見解をしめすようになり、インドの伝統を重視し間接統治を主張する行政官グループから大きな影響を受けるようになった。その後、1840 年代から 1850 年代にミルは再び部分的に直接統治を支持するようになっていく。このようなミルのインド統治に関する見解の変遷は、彼の政治思想の発展とパラレルに進んでいるように見える面があり、インド統治の経験が彼の政治思想の発展に影響を与えていた可能性は否定できないが、ザストウピルの議論はこの点に関する限り、論拠が十分であるようには思われない。それでも、同書は、ミルとインドの関わりの多様な側面を検討している Moir, Peers, and Zastoupil eds (1999) と合わせて、このトピックに関する今後の研究の出発点となる著作である。

なお、ミルのインド論については、上述の研究書の構成・章立てが示唆するように、『イギリス領インド史』の著者であり東インド会社社員でもあった父ジェイムズ・ミルとのより詳細な比較研究が不可欠であるが、ジェイムズ・ミル研究についてはいまだに道半ばの感が強い。²⁰

6-3-2. アイルランド

アイルランドはイギリス帝国内でインドとならんでミルが多大な関心を向けた国であった。文明段階論的枠組みを用い、ヨーロッパの進歩とアジア的停滞という二分法的思考にしばしば依拠していたミルにとって、アイルランドはイングランドによる抑圧的支配のもとで進歩が阻害され文明の恩恵を享受できずにいる国家であり、その状況の改善は強い関心の対象であった。いわゆるアイルランド問題(イングランドのアイルランドに対する抑圧政策に起因するさまざまな問題)へのミルの関心は 1826 年にアイ

ルランドにおけるカトリック問題に関する論考を発表して以来、1868 年 2 月の『イングランドとアイルランド』の公刊や 3 月のアイルランドに関する議会演説まで 40 年以上にわたるものであった。とりわけ、1840 年代 半ばの大飢饉に際して「アイルランドの状態」と題して発表された計 43 編の論考は多くの関心を集めてきたが、近年では Kinzer (2001) が、土地問題だけでなく、ミルの生涯にわたるアイルランドに関する言明を包括的に取り上げて時系列にしたがって分析しており、ミルのアイルランド論としては現在までもっとも包括的でバランスのとれた研究となっている。

7・終わりに

トロント大学版著作集の刊行と軌を一にして進展した 20 世紀後半のミル研究は、単純化すれば、伝統的解釈から修正的解釈へという流れによって特徴づけられる。伝統的解釈では、さまざまな形の「二人のミル」が指摘され一功利主義者ミルと自由主義者ミル、権威主義的ミルと自由主義的ミルなど、その議論は解消しがたい矛盾を含む、体系的な一貫性のない折衷的で不十分なものとして批判され、「乗り越え」の対象となっていた。それに対して修正的解釈は、伝統的解釈を批判し、ミルの思想を緻密なテキスト読解に基づいて一貫性をもったものとして解釈し、彼の思想を矛盾のない堅固な理論として提示することを目指し、多大な成果を上げてきた。これらの研究がミルを「生氣なき折衷」とみなす見解を過去のものにし、ミルの思想が現代社会においてもっている重要性を明らかにすることに貢献したことは間違いないだろう。

現在のミル研究は、この修正的解釈から多くを学び、それに多大な貢献をしながら、さらに新しい段階に進みつつある。ミルの思想が一貫しているか矛盾しているかという、ともすれば不毛になりかねない問題設定自体は影をひそめ、もし矛盾に見える要素があるとしたら、それがミルの体系の中で、そしてミルが思索していた知的・歴史的コンテキストの中で、どのような位置づけや意義をもっていたかをさぐる研究が、これまで以上に盛んになっている。こうしてミル研究はますます多様化・複雑化し、このような研究の深化は、いくつかの重要なトピックについて、研究者の間で

の意見の一致を促進するよりも、その不一致を増幅させている感すらある。そして、その帰結として、ミルの人間・思想の「全体像」を描きだそうとする試みは(そのようなことがそもそも可能であったとしても)絶望的に困難になっていだろう。それでも、このような状況は思想家研究においてしばしば見られる「幸福」な状態であるように筆者には思えるし、著作集完結という契機を、そして生誕 200 年という契機を経たミル研究がたどりついている状態であるように思われる。

注

- 1 本稿は川名 (2015) に加筆修正し再構成したものである。膨大な量の文献に網羅的に言及することは不可能であり、意義のあることでもないので、本稿で取り上げる文献は英語圏のものを中心に、分野・数ともに筆者の関心と能力にしたがって限定されている。
- 2 本稿でのミルの引用は、すべてこの著作集からおこない、略記 CW と併せて巻数とページ数を記す(例: CW, X, 1.= 著作集第 10 巻1頁)。
- 3 ロブソン自身による編集方針などの説明については、Robson (1967; 1981) を参照のこと。本著作集には、ミルの東インド会社での業務に関連する文書や、彼が長く趣味としていた植物学関係の資料は収録されていない。また、著作集完結後にも、著作集未収録の資料の整理・公刊がすすめられており、直近では Inoue ed. (2014) のような刊行物がある。
また、ミル研究に深く関係するジェレミー・ベンサムやジェイムズ・ミルの資料の整備も進んでいる。ベンサムについては、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンのベンサム・プロジェクトによる新版著作集の刊行が進んでおり、ジェイムズ・ミルについては、ロンドン図書館所蔵の未公開ノート類をロバート・フェンが生前に転写・整理していたものがオンラインで公開されている(<http://intellectualhistory.net/mill/>[2015年8月15日最終確認])。
- 4 現在ではアメリカ合衆国の非営利団体 Liberty Fund が運営するウェブサイト Online Library of Liberty において、トロント大学版著作集の PDF 版および html 版が無償で公開されている(<http://oll.libertyfund.org/>[2015年8月15日最終確認]ただし、著作集全体への索引である第 33 巻は除かれている)。
- 5 2009 年の『自由論』出版 150 周年の際にも、筆者が知るかぎりでも、学術集会在いくつか開かれていたが、『自由論』と同じ年に出版されたダーウィン『種の起源』への関心の影に隠れてしまった感があった。
- 6 行為／規則功利主義と直接／間接功利主義というふたつの区別は同じもの

を別の名称で呼んでいるにすぎないという説明、すなわち行為功利主義＝直接功利主義、規則功利主義＝間接功利主義であるとする説明がしばしばみられるが、これは正確ではない。たとえば、直接功利主義であっても、行為功利主義は個々の行為の帰結の功利性を考慮しながら行為し、規則功利主義は規則の功利性を考慮して行為することになる。

- 7 福利主義は、サムナーの表現を借りれば、「倫理理論が究極的に、しかもそれ自体のために真剣にとらえる必要のある価値は、福利に尽きるという見解」である (Sumner 1996, 3)。ただし、この立場をとらない功利主義もある。
- 8 いうまでもなく、これらの幸福観の理論としての優劣と、どの理論によってミルの議論がもっともうまく解釈できるかは別の問題である。
- 9 主観説としての快樂説の難点を乗り越えようとした欲求充足説は、主観説と客観説のハイブリッド説とも言えるが、欲求の対象となるのは外的世界の客観的事態であるのに対して、当該の客観的事態の成立を価値あるものにしてしているのは主体の欲求という主観的要素にほかならないので、一般的には主観説に分類される。さらに近年では、快樂説も客観説として理解しようとする議論もある (Bradley 2014)。
- 10 ただし、愉樂は快樂とまったく同義ではない。クリस्पの例では、登山は山頂にたどり着くことによって得られる最終的な快樂のために山を登るという苦痛を甘受することが愉樂ということになる (Crisp 1997, 27-28)。
- 11 小田川 (2014) はこのヌスバウムの議論を手がかりに、ミルの政治哲学の重層性を検討している。
- 12 なお、この論点については、とりわけ直観主義批判との関連から、大久保 (2013) や、岡本慎平「J・S・ミルの現象主義的認識論と直観的知識」(日本イギリス哲学会第 36 回研究大会、2012 年 3 月 28 日) などのように日本においても近年重要な成果が生み出されつつある。
- 13 この著作は、ベンサム草稿をグロートが編集して 1822 年にフィリップ・ビーチャム (Philip Beauchamp) という仮名で出版したものである。
- 14 この構想に関する筆者の見解については、川名 (2012) を参照のこと。
- 15 このような研究と関連するが、かつてヒンメルファーブ (Himmelfarb 1974) が指摘した『自由論』のミルと「もう一人の」ミルという「二人のミル」問題が、「リベラルなミル」と「シヴィックなミル」の混在の問題として装いをあらためて議論されるようになっていく。この問題については、Justman (1991) のように二つの要素を対立的にみなす見解がある一方で、Miller (2000) や小田川 (2003) は整合的な解釈を試みている。
- 16 また、古代アテネに関するミルとグロートの議論を比較した論文として、Demetriou (2013) が公刊されている。ミルの古典古代論については、ミルの議論の内在的分析とともに、ジェームズ・ミルやジョージ・グロートと

- いった、ミルの身近で古典古代に関心をもっていた思想家との比較分析をすすめることによって、さらなる成果が期待できるだろう。
- 17 ただし、Varouxakis (2013, 6-8) が注意を促しているように、ふたつの論考の発表年が同じなのはほとんど偶然の結果であり、そこに何らかの意図や理論的関連を過剰に読み込むことには慎重でなければならない。
- 18 Schofield (2013) は、ベンサム法の理論を視野に入れて、オースティンのミルに対する影響を論じている。
- 19 なお、Varouxakis (2009) では、ミルの国際政治思想が近年の研究状況とあわせて概観されている。
- 20 ジェイムズ・ミルの『イギリス領インド史』を取り上げたモノグラフとして Majeed (1992) があるが、研究の蓄積という点ではまだ不十分である。日本語では、安川 (1997; 1999) が重要である。

参考文献

- Armitage, D. (2004) 'The Fifty Years' Rift: Intellectual History and International Relations', *Modern Intellectual History*, 1(1): 97-109.
- Armitage, D. (2014) 'The International Turn in Intellectual History', in *Rethinking Modern European Intellectual History*, ed. by D. M. McMahon and S. Moyn, Oxford: Oxford University Press.
- Ball, T. (2000) 'The Formation of Character: Mill's "Ethology" Reconsidered', *Polity*, 33: 25-48.
- Baum, B. D. (2000) *Rereading Power and Freedom in J. S. Mill*, Toronto: University of Toronto Press.
- Bell, D. (2010) 'John Stuart Mill on Colonies', *Political Theory*, 30: 1-31.
- Berger, F. (1984) *Happiness, Justice and Freedom: Moral and Political Philosophy of John Stuart Mill*, Berkeley: University of California Press.
- Berlin, I. (1991) 'John Stuart Mill and the Ends of Life', in *J. S. Mill On Liberty in Focus*, ed. by J. Gray and G. W. Smith, London: Routledge.
- Bradley, B. (2014) 'Objective Theories of Well-Being' in *The Cambridge Companion to Utilitarianism*, ed. by B. Egleston and D. Miller, Cambridge: Cambridge University Press.
- Brink, D. (1992) 'Mill's Deliberative Utilitarianism', *Philosophy and Public Affairs*, 21: 67-103.
- Brink, D. (2013) *Mill's Progressive Principles*, Oxford: Oxford University Press.
- Brink, D. (2014) 'Mill's Ambivalence about Duty', in *Mill on Justice*, ed. by L. Kahn, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Capaldi, N. (1973) 'Mill's Forgotten Science of Ethology', *Social Theory and*

- Practice*, 2: 409-420.
- Claeys, G. (2013) *Mill and Paternalism*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Collini, S. (1980) 'Political Theory and the "Science of Society" in Victorian Britain', *Historical Journal*, 23: 203-231.
- Collini, S., D. Winch, and J. Burrow (1983) *That Noble Science of Politics: A Study in Nineteenth-Century Intellectual History*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Crisp, R. (1997). *Mill on Utilitarianism*. London: Routledge.
- Demetriou, K. N. (2013) 'The Spirit of Athens: George Grote and John Stuart Mill on Classical Republicanism', in *John Stuart Mill: A British Socrates*. ed. by K. N. Demetriou and A. Loizides, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Demetriou, K. N. and A. Loizides eds (2013) *John Stuart Mill: A British Socrates*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Donner, W. (1991) *The Liberal Self: John Stuart Mill's Moral and Political Philosophy*, New York: Cornell University Press.
- Doyle, M. (2013) 'J. S. Mill on Nonintervention and Intervention', in *Just and Unjust Military Intervention: European Thinkers from Vitoria to Mill*, ed. by S. Recchia and J. Welsh, Cambridge: Cambridge University Press.
- Eggleston, B., D. Miller, and D. Weinstein eds (2011) *John Stuart Mill and the Art of Life*, Oxford: Oxford University Press.
- Gray, J. (1983) *Mill on Liberty: A Defence*, London: Routledge.
- Griffin, J. (1986) *Well-Being: It's Meaning, Measurement, and Moral Importance*, Oxford: Oxford University Press.
- Hamburger, J. (1999) *John Stuart Mill on Liberty and Control*, Princeton: Princeton University Press.
- Himmelfarb, G. (1974) *On Liberty and Liberalism: The Case of John Stuart Mill*, New York: Knopf.
- Inoue, T. ed. (2014) *J. S. Mill's Journal and Notebook of a Year in France, May 1820-July 1821: A Complete Edition with A Facsimile Reprint of the Rediscovered Notebook of John Stuart Mill in Kwansai Gakuin University and Transcribed Text, Annotation and Comparative Studies*, Tokyo: Edition Synapse.
- Justman, S. (1991) *The Hidden Text of Mill's Liberty*, Lanham: Rowman & Littlefield.
- Kahn, L. (2012) *Mill on Justice*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Kinzer, B. (2001) *England's Disgrace?: J. S. Mill and the Irish Question*, Toronto: University Toronto Press.
- Kubitz, O. A. (1932) *Development of John Stuart Mill's System of Logic*, Urbana: The University of Illinois.
- Levin, M. (2004) *J. S. Mill on Civilization and Barbarism*, London: Routledge.

- Loizides, A. (2013) *John Stuart Mill's Platonic Heritage: Happiness through Character*, Lanham: Lexington Books.
- Loizides, A. ed. (2014) *Mill's A System of Logic: Critical Appraisals*, New York: Routledge.
- López, R. (2012) 'John Stuart Mill's Idea of History: A Rhetoric of Progress', *Res Publica: Revista de Filosofía Política*, 27: 63-74.
- Lyons, D. (1994) *Rights, Welfare and Mill's Moral Theory*, Oxford: Oxford University Press.
- Majeed, J. (1992) *Ungoverned Imaginings: James Mill's The History of British India and Orientalism*, Oxford: Oxford University Press.
- Mehta, U. S. (1999) *Liberalism and Empire: A Study in Nineteenth-Century British Liberal Thought*, Chicago: University of Chicago Press.
- Miller, D. E. (2000) 'John Stuart Mill's Civic Liberalism', *History of Political Thought*, 21: 88-113.
- Miller, D. E. (2010) *J. S. Mill: Moral, Social and Political Thought*, London: Polity.
- Moir, M., D. Peers, and L. Zastoupil eds (1999) *J. S. Mill's Encounter with India*, Toronto: Toronto University Press.
- Nozick, R. (1974) *Anarchy, State, and Utopia*, New York: Basic Books.
- Nussbaum, M. C. (2004) 'Mill between Aristotle & Bentham', *Daedalus*, 133(2): 60-68.
- Parfit, D. (1984) *Reasons and Persons*, Oxford: Oxford University Press.
- Petit, P. (1997) *Republicanism: A Theory of Freedom and Government*, Oxford: Oxford University Press.
- Pitts, J. (2005) *A Turn to Empire: The Rise of Imperial Liberalism in Britain and France*, Princeton: Princeton University Press.
- Priestley, F. E. L. and J. Robson eds (1963-1991) *Collected works of John Stuart Mill*, 33 vols, Toronto: Toronto University Press and London: Routledge.
- Raeder, L. C. (2002) *John Stuart Mill and the Religion of Humanity*, Missouri: University of Missouri Press.
- Riley, J. (1998) *Mill on Liberty*, London: Routledge.
- Robson, J. (1967) 'Principles and Methods in the Collected Edition of John Stuart Mill', in *Editing Nineteenth Century Texts*, ed. by J. Robson, Toronto: Toronto University Press.
- Robson, J. (1981) 'A Mill for Editing', *Browning Institute Studies*, 9: 1-13.
- Rosen, F. (2006) 'The Philosophy of Error and Liberty of Thought: J. S. Mill on Logical Fallacies', *Informal Logic*, 26(2): 121- 147.
- Rosen, F. (2012) *Mill*, Oxford: Oxford University Press.
- Ryan, A. (1970) *The Philosophy of John Stuart Mill*, London: Macmillan.

- Ryan, A. (2014) 'A System of Logic and the "Art of Life"', in *Mill's A System of Logic*, ed. by A. Loizides, New York: Routledge.
- Scarre, G. (1989) *Logic and Reality in the Philosophy of John Stuart Mill*, Dordrecht: Kluwar.
- Schofield, P. (2013) 'John Stuart Mill on John Austin (and Jeremy Bentham)', in *The Legacy of John Austin's Jurisprudence*, ed. by M. Freeman and P. Mindus, Dordrecht: Springer.
- Sell, A. P. F. (2004) *Mill on God: The Pervasiveness and Elusiveness of Mill's Religious Thought*, Aldershot: Ashgate.
- Semmel, B. (1984) *John Stuart Mill and the Pursuit of Virtue*, New Haven: Yale University Press.
- Shaw, W. H. (2014) 'Rights, Justice, and Rules and in Mill's Utilitarianism', in *Mill on Justice*, ed. by L. Kahn, Basingstoke: Palgrave.
- Skinner, Q. (1997) *Liberty before Liberalism*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Skinner, Q. (2002) 'A Third Concept of Liberty', *Proceedings of the British Academy*, 117: 237-68.
- Skorupski, J. (1989) *John Stuart Mill*, London: Routledge.
- Skorupski, J. (2006) *Why Read Mill Today?*, London: Routledge.
- Skorupski, J. ed. (1998) *The Cambridge Companion to Mill*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Snyder, L. (2006) *Reforming Philosophy: A Victorian Debate on Science and Society*, Chicago: University of Chicago Press.
- Stokes, E. (1959) *The English Utilitarians and India*, Oxford: Oxford University Press.
- Su, H. (2013) *Economic Justice and Liberty: The Social Philosophy in John Stuart Mill's Utilitarianism*, New York: Routledge.
- Sumner, L. W. (1996) *Welfare, Happiness and Ethics*, Oxford: Oxford University Press.
- Ten, C. L. (1991) 'Mill's Defence of Liberty', in *J. S. Mill on Liberty in Focus*, ed. by J. Gray and G. W. Smith, London: Routledge.
- Ten, C. L. ed. (2010) *Mill's On Liberty: A Critical Guide*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Urbinati, N. (2002) *Mill on Democracy: From the Athenian Polis to Representative Government*, Chicago: University of Chicago Press.
- Urbinati, N. and A. Zakaras (2007) *J. S. Mill's Political Thought: A Bicentennial Reassessment*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Urmson, J. O. (1953) 'The Interpretation of the Moral Philosophy of J. S. Mill',

Philosophical Quarterly, 3: 33-39.

- Varouxakis, G. (1997) 'John Stuart Mill on Intervention and Non-intervention', *Millennium: Journal of International Studies*, 26: 57-76.
- Varouxakis, G. (2002) *Mill on Nationality*, London: Routledge.
- Varouxakis, G. (2009) 'The International Political Thought of John Stuart Mill', in *British International Thinkers from Hobbes to Namier*, ed. by I. Hall and L. Hill, New York: Palgrave Macmillan.
- Varouxakis, G. (2013) *Liberty Abroad: J. S. Mill on International Relations*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Varouxakis, G. and P. Kelly, eds (2010) *John Stuart Mill, Thought and Influence: The Saint of Rationalism*, London: Routledge.
- Walzer, M. (1977) *Just and Unjust Wars: A Moral Argument with Historical Illustrations*, New York: Basic Books.
- Walzer, M. (2007) 'Mill's "A Few Words on Non-Intervention": A Commentary', in *J. S. Mill's Political Thought: A Bicentennial Reassessment*, ed. by N. Urbinati and A. Zakaras, Cambridge: Cambridge University Press.
- West, H. (2004) *An Introduction to Mill's Utilitarian Ethics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- West, H. (2014) 'Mill and Utilitarianism in the Mid Nineteenth Century', in *The Cambridge Companion to Utilitarianism*, ed. by B. Eggleston and D. E. Miller, Cambridge: Cambridge University Press.
- Zastoupil, L. (1994) *John Stuart Mill and India*, Stanford: Stanford University Press.
- 有江大介 (2008)「J・S・ミルの宗教論—自然・人類教・“希望の宗教”—」, 『横浜国際社会科学研究』12: 676-708.
- 内井惣七 (1988)『自由の法則・利害の論理』ミネルヴァ書房 .
- 大久保正健 (2013)「ジョン・スチュアート・ミルと直観主義形而上学」, 有江大介編『ヴィクトリア時代の思潮と J・S・ミル—文芸・宗教・倫理・経済—』三和書籍、所収 .
- 小田川大典 (2003)「J・S・ミルにおけるリベラリズムと共和主義」、『政治思想研究』3: 29-45.
- 小田川大典 (2014)「ジョン・スチュアート・ミル—功利主義と代議制—」, 宇野重規編『近代の変容(岩波講座政治哲学第3巻)』岩波書店、所収. 川名雄一郎 (2012)『社会体の生理学—J・S・ミルと商業社会の科学—』京都大学学術出版会 .
- 川名雄一郎 (2015)「新しい資料、新しい思想?—近年の J・S・ミル研究—」, 『経済学史研究』56(2): 67-93.
- 佐々木憲介 (2001)『経済学方法論の形成—理論と現実との相剋—』北海道大学図書刊行会 .

- 佐々木憲介(2010)「J・S・ミルと歴史学派」、『経済学研究』(北海道大学)、60(3):15-27.
- 佐々木憲介(2013)『イギリス歴史学派と経済学方法論争』北海道大学出版会 .
- 下條慎一(2013)『J・S・ミルの市民論』中央大学出版部 .
- 深貝保則(2007)「2つのJ・S・ミル生誕200年記念研究集会(2006年4月、ロンドン;2006年9月、横浜)に参加して」、『イギリス哲学研究』30: 197-199.
- 松井名津(2010)「J・S・ミル経済学方法論における帰納的性格」、只腰親和・佐々木憲介編『イギリス経済学における方法論の展開—演繹法と帰納法—』昭和堂、所収 .
- 水野俊誠(2014)『J・S・ミルの幸福論—快樂主義の可能性—』梓出版社. 矢島杜夫(1993)『ミル『論理学体系』の形成』木鐸社.
- 安川隆司(1997)「ジェイムズ・ミル『英領インド史』再考—『文明の階梯』と『法の相対的優良性』」、『東京経大会誌』203: 65-88.
- 安川隆司(1999)「ミル父子と植民地」、西澤保他編著『経済政策思想史』有斐閣、所収 .
- 山本圭一郎・川名雄一郎(2006)「ミル研究の現在」、『イギリス哲学研究』26: 126-134.